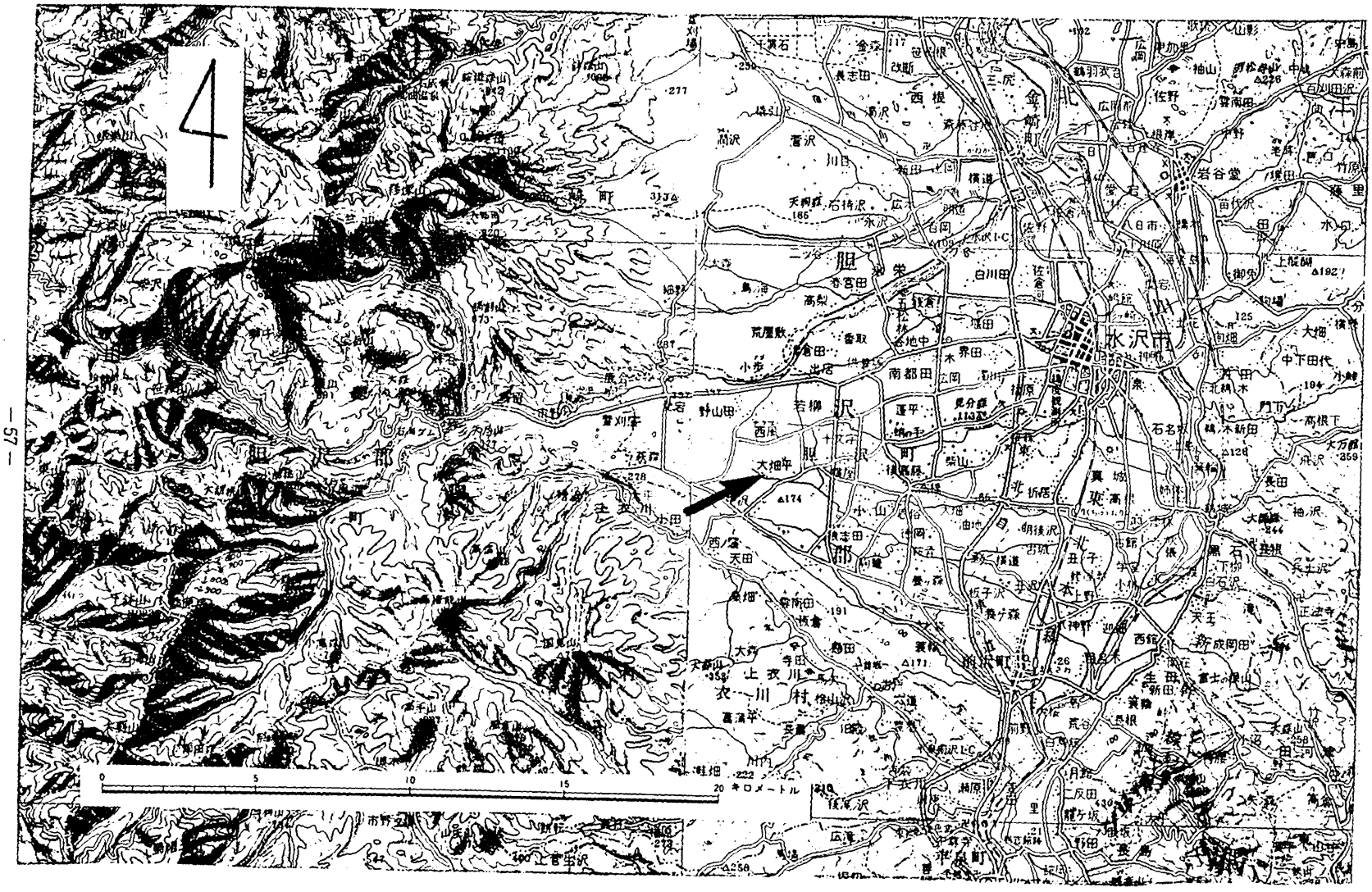
# 胆沢扇状地

# 正　誤　表

| 頁 | 行(欄) | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 8 | 左31～32行目 | ここにおいい | ここにおいて |
| 8 | 左38行目 | 交通条決 | 交通条件 |
| 10 | 左5行目 | 1975年 | 1970年 |
| 19 | 左6行目 | 崩芽 | 萌芽 |
| 21 | 左2行目 | 芸坡 | 芸岐 |
| 25 | 右12行目 | 1/2たったが | 1/2だったが |
| | 第1図 | ～地区 | ～地域 |
| 30 | 右23行目 | 湯治湯 | 湯治場 |
| 31 | 注7) | 農用水 | 農業用水 |
| 33 | 8行目 | 「続南東沼誌」 | 「続南東沼郡誌」 |
| 40 | 右2行目 | 2万千分の1 | 2万5千分の1 |
| 43 | 左12行目 | Loc.9では・礫 | Loc.9では；礫 |
| 44 | 行目 | IViとIVlに分類 | IVuとIVlに分類 |
| 58 | 左1行目 | 時つ | 持つ |
| 75 | 右19行目 | ガツコ | ガツゴ |
| 75 | 右23行目 | 専太郎池 | 専太郎堤 |
| 76 | 右24行目 | 旧鷹栖村 | 旧鷹栖村[39] |
| 77 | 左4行目 | ている。 | ている。[40] |
| 77 | 左11行目 | る。 | る。[41] |
| 77 | 左37行目 | 問題 | 問題[42] |
| 77 | 右10行目 | ごこれ | なされ[43] |
| 78 | 左2行目 | 旧農家 | 旧農家[44] |
| 79 | 右4行目 | 「大平畑」 | 「大畑平」 |
| 79 | 注20) | 3堰 | 三堰 |


4
大畑平
上衣川村
水沢市
0 5 10 15 20 キロメートル

# 胆沢扇状地における散居集落

## ― 大畑平を事例として ―

大原由起子・柳沢孝子
中田　勝

### はしがき

集落形態において独特の景観を持つ散居集落は古くから地理学者の関心を仰ぎ，数々の研究結果が報告されている。散居集落の標式例とされる砺波平野に関しては，戦前に小川琢治が散居景観に着目して[1]以来，牧野信之助の報告[2]，戦後には村松繁樹[3]や石田竜次郎[4]の報告があり，近年には金田章裕の研究[5]が挙げられる。

また，大井川扇状地を扱ったものには小寺廉吉・岩本英夫の報告[6]や近年の岡村光展[7]および谷岡武雄[8]の報告が挙げられ，讃岐平野を扱った石原潤[9]等，他地域の散居集落についての考察も多い。一方，胆沢扇状地を扱った研究報告には村田貞蔵[10]，山口弥一郎[11]，長井政太郎[12]，池田雅美[13]等のものがある。村田は散居形態及び屋敷構造について注目し，山口は家屋と耕地について考察を加え，長井は集落の変容について池田は散居集落の発達を用水路利用の観点からそれぞれ考察している。そして，上記研究報告はいずれも胆沢扇状地全域をかなり巨視的に考察しているものが多い。

しかしながら，開田の様子，農業経営構造，本家分家の分析および近年の広域水田開発などの視点に立って当地域の集落の現状および展開に関してのより詳細な考究については，なお検討の余地があるように思われる。

本稿では，胆沢扇状地に含まれる字「大畑平（おおはたひら）」地区を事例とし，この地域の本家・分家および圏外入植農家による集落の変容や集落内の社会構造，農業経営構造について考察して行きたい。また，同じ散居集落として研究が進んでいる砺波平野の旧鷹栖村（現砺波市）と比較し，大畑平地区の散居の特色を随時考察したい。

### I　地域の概観

岩手県南西部に位置する胆沢郡胆沢町のおよそ東半分および水沢市，前沢町の一部を占める胆沢扇状地は，平地に乏しい県内において，屈指の米作地域となっている。この扇状地の開田は，自然条件に左右されたため現在に至る水田分布を出現せしめた。

本節では，胆沢扇状地の自然環境にまず触れ，次に自然環境と水田開発との関連及び胆沢扇状地における散居集落についても若干考察を加えたい。

胆沢扇状地の自然環境については，戦前の村田貞蔵[14]や田山利三郎[15]の報告があり，近年には中川久夫他7人の地形・地質調査報告書[16]及び経済企画庁の調査報告書[17]がある。また以上をまとめた池田雅美の記載[18]も挙げられる。ここでは池田の報告にしたがい，胆沢扇状地の地形に関し巨視的に触れたい。

本扇状地は更新世における胆沢川の流路変更に起因する洪積台地で，第三紀の基盤上に礫層及び火山灰層が重なり，扇頂部の市野々から東の北上川に接する扇端部に向けて緩傾斜で高度を低下させている。扇状地の半径は約20kmで，扇頂部の標高は約250m，扇端部のそれは30～40mとなっている。扇面は西から東方向に低下するとともに，南の扇側から北の扇側にかけても漸次高度を下げている。これは北に傾く地盤運動のために胆沢川の流路が，南から北へ移行した結果，6段と推定される河成段丘〔前注14)〕が形成されているからである。中川久夫らは，これらの段丘を南から高位段丘，中位段丘，低

位段丘と大別し，それぞれを一首坂段丘，胆沢段丘水沢段丘と称した（Ⅰ－1図）。

したがって，扇状地は南側ほど高位面で，段丘形成期がより古いため，開析が進んでいる。特に高位段丘および中位段丘は開析が進行した結果，モナドノック状の丘陵群が細長く発達し，扇状地全体は扇骨状，掌状な景観となっている。また扇央部には胆沢一油島撓曲崖が形成されており，地形をより複雑にしている。したがって本扇状地は地形において，日本の標式的な扇状地とは言い難く，むしろ，起伏に富む複雑な台地と言えよう。

池田雅美によれば〔前注13)〕この扇状地の企画的水田開発は，三堰，茂井羅，寿安羅（Ⅰ－2図）などの，開拓に必要な水ひきが開かれてからであろうとしており，中世末期～近世初期にこれら3堰が開かれたようである。[20]

3堰の位置は前述の胆沢段丘，水沢段丘という中位～低位段丘地域と一致している。

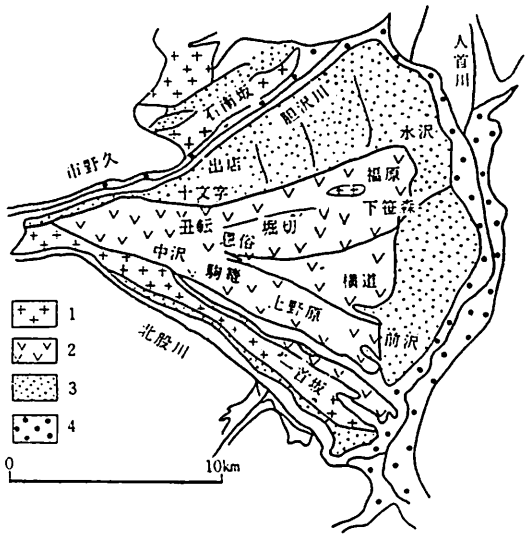
一方，前述の一首坂段丘（高位段丘）上および扇頂部の企画的水田開発をうかがわせるものに穴山堰[21]があり，これは上記3堰の開堰に先行して開かれたようである〔前注13)〕。これらから考察すれば，胆沢段丘，水沢段丘という中位～低位段丘上は，高度が比較的低く，水利に恵まれ，早くから開田が進んだのに対して，一首坂段丘上および胆沢一油島撓曲線以西の扇頂部の本格的開田はかなり遅れたと考えられる。事実，近年，石淵ダム建設に伴い，扇状地のほぼ全域に水路が設置されてはいるが，扇頂部周辺では，今日でも溜池に頼る農家があり，開田の歴史的差異は現在でも見られる。

また，家屋の分布については，扇端部が水沢市を中心としてかなり集村化しているのを除けば，扇央付近は扇状地の中では相対的に家屋密度が高く，本格的開田の新しい扇頂部および一首坂段丘上は家屋密度が低い。[22]

## Ⅱ　家屋と耕地

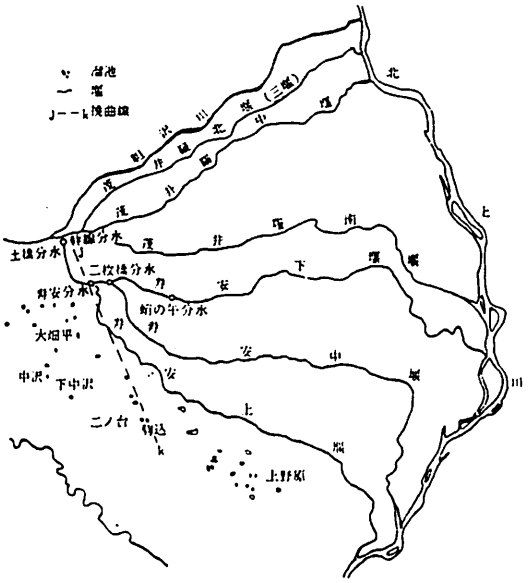
### 1．大畑平の概観

本稿の対象である「大畑平」地区は，扇状地の南




胆沢扇状地上の段丘分布
（中川久夫外北上川中流沿岸の第4系及地形による）
①一首坂段丘　②胆沢段丘　③水沢段丘　④河岸低地
本図は池田雅美：「胆沢扇状地における開拓過程の歴史地理的研究」人文地理18－1，1966，P4より転載した

Ⅰ－1図　胆沢扇状地区の段丘分布




（池田雅美：「胆沢扇状地における開拓過程の歴史地理的研究」人文地理18－1，1966，P17より転載した）

Ⅰ－2図　胆沢扇状地における堰と溜池分布

西部に位置し，面積は約7.4㎢で，先述した一首坂段丘面と胆沢段丘面にまたがり，扇頂に近いため，標高は130～200mと高い。また，大畑平は南西―北東方向に走る小崖によって3段の平坦面に分けられている。

本稿では，便宜上，この平坦面を低い方から，大畑平低位面・中位面・高位面と称す。大畑平は，扇状地の北東部と比較すれば，水が得にくいことから開拓には不利な条件を有していた。しかし，この地区は，胆沢開拓により昭和34年に一挙に水田化された。また，現在この地区は，すべての家で農業が営まれ，稲作・牧畜が盛んである。

(1) 家屋の分布と増加

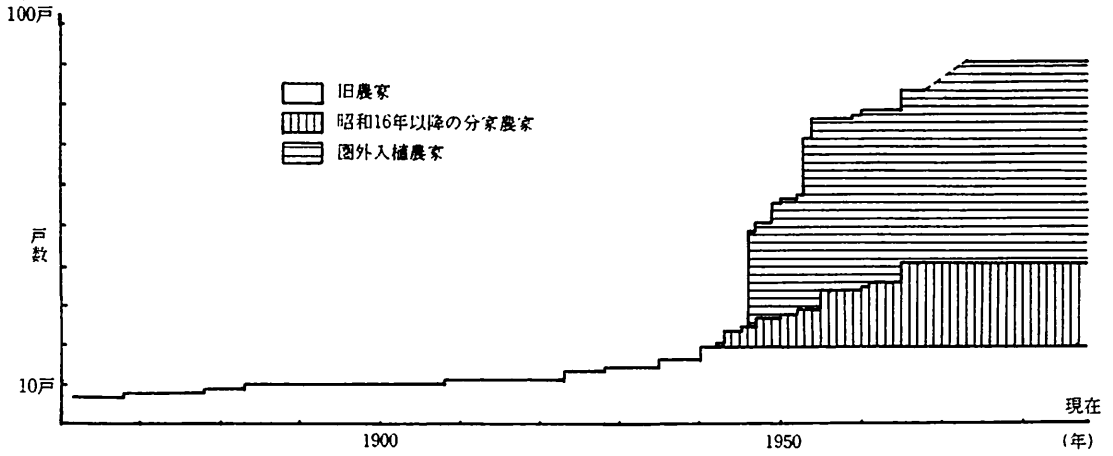
先に山口〔前注11)〕が命名した「えぐね式屋敷」は，この大畑平にも見られる。「えぐね」で囲まれた家屋が分散する様相は，散居独特の景観である。大畑平は日本の他地域における散居村と比較してもまた，胆沢扇状地の北東部と比較しても，家屋密度は低い。家屋の分布は一見不規則であるが，多少の密度の偏在が見い出される。たとえば，家屋は平坦面を限る小崖とそれに平行する数本の道路沿いに集中する。しかしこれらの家屋もそれぞれ50～150m離れて並んでいる。大畑平全体では，隣家との距離は，200m前後，家屋密度は約11.4戸／㎢である。

次に大畑平における戸数の増加をみると，安政年間に入り，現在「旧農家」と称される農家の本家が7戸入植した（離脱したものを除く）。戸数の増加は，明治時代からの分家による増加以外はみられない。昭和16年から一部の入会地が開墾されたが[23]，実際の入植者は少数の地元の分家に限られた。続いて昭和21年から，地元の2・3男，他県・他地区からの入植者による開墾（開畑）が始まり，大幅な戸数増加をみた。現在では昭和21年以降の入植者が大畑平地区農家の半分以上を占めている（Ⅱ－1図）。

以上のごとく，大畑平の現在の散居景観の成立過程には，庄川扇状地[24]や大井川扇状地〔前注7)〕のごとく，中世からの開墾というような連続的要因は認められない。現在の大畑平は直接には安政期以前にたどれないからである[25]。また，大畑平を構成する農家は，安政年間に入植した本家筋，および分家と，戦後の入植農家に大別される。それゆえ，大畑平の集落の発展過程を知るためには，全く起源の異なる二者の関連性を究明することが重要であろう。

## 2．本家・分家（旧農家）

大畑平では，本家筋とその分家のうち，昭和16年の開墾までの分家を「旧農家」と呼び，それ以降の分家と区別している[26]。起源の古い散居村との比較と




Ⅱ－1図　大畑平地区における戸数増加

〈聴きとり調査により作成〉

なりうるのは，大畑平では旧農家である。本節では旧農家と昭和16年以降の分家農家とを別項に扱い，その家屋と耕地の歴史的変遷を順次解明することにより，大畑平の散居形成の過程を考察したい。

(1) 大畑平の土地利用

まず，土地所有変遷を考察する前提として，昭和初期までの大畑平の土地利用を概観したい。

大畑平の主な土地利用は，水田・畑地・山林・原野であった。元来大畑平は山林と原野が展開する台地化した扇状地であり，それを水田化および畑地化した点が重要である。水田は旧農家の先祖が開田したものではなく，それ以前の開拓者による水田跡と水路跡を踏襲したものであった。その分布は，低位面と中位面に帯状に集中し，いずれも北西端の若干離れたところに溜池を有していた。消失したものを含めると，溜池は4つあった。

対照的に畑地は，水田のように集中しておらず，大抵は家屋の近辺か，田地の周囲に分布していた。山林は小崖に長く続き，一部は平坦地にも分布していた。

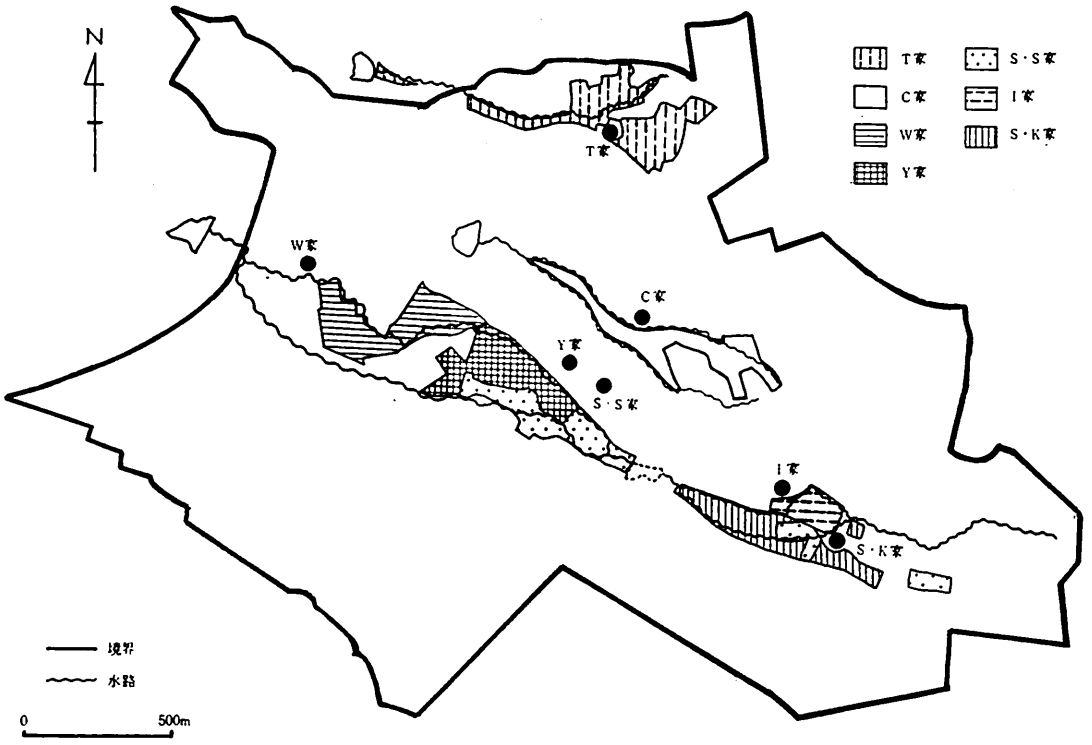
原野は，田畑を除く低中高位面に分布していた。原野は入会地であり，小崖に位置する山林が民有地の境であった。水田の北側の山林は，「えぐね」としてそのまま使用されている場合が多い。

(2) 本家の入植

本家の土地所有は，先述の溜池と水田の分布に深く関連している。地元では，昭和16年までに水田化されていた田を「旧田」と呼ぶため，以下「旧田」とする。

旧田は，低位面と中位面の中でも，窪地に帯状に集中している。これは，天水を溜めた池から水を流すのに適した土地であった。旧田は4つに区分され7戸の本家に所有されていた（Ⅱ－2図）。

ここで，聴き取りの結果から，旧農家の7戸の本家筋のうち，W系統とY系統の具体的な入植の仕方を述べたい。




Ⅱ－2図　系統別の旧田所有状態〈聴きとり調査により作成〉

まず，W系統は，本家筋のうち最初に入植した。先祖は小山管谷地で，すでに家畜商を営んでおり，入植は草地を求めての分家であった。開墾したところは，旧田の溜池に近い方の部分であった。水田は当初は約2町5反[27]と少ないが，畑地・草地を含めると広大な耕地を所有していた。

家屋は水田の北側で，溜池に近いところに位置した。

Y系統は，W系統の1～2年後に入植した。先祖は小山上十文字に，何代にもわたり耕地を所有していたが，安政年間に耕地の拡大のため大畑平に入植した。耕地は，W系統と同じ旧田の水下を所有していた。旧田は5町近くと多く，家屋は旧田の北側に位置した。

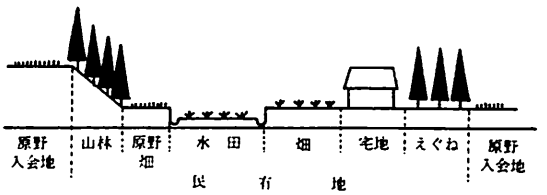
以上のように，入植は，水上から順次行なわれている。従って，入植に当り，水路の確保を重視した耕地の選択があったと考えられる。1つの溜池の共同使用にもかかわらず，水利上の対立が見られないことは，農家同志の結びつきが強かったことを示している。

また，全ての旧農家の家屋が，それぞれ旧田の北側に位置している。これは他散居地域の家屋の位置と同様に，低地に水田，微高地に家屋という原則に基づいている。ただし，微高地というだけなら，旧田の南側も条件は同じであるが，北側が選択された理由は，風よけの「えぐね」を家屋の裏側（北）に持ったためである。すなわち耕地が家屋に接していることでは，耕地の宅地周辺への集中と言えるが，他散居地域のような圏構造〔(前注24)〕とは異なり，耕地は家屋の正面に帯状の広がりを持つ。

以上から，本家の耕地は，水の確保に限定され，家屋は，広大な土地所有と水田の北側の立地から分散したと思われる。以上の家屋立地をモデル化すればⅡ－3図のごとくである。

(3) 分家の出し方

大畑平の旧農家の場合，同族分岐は必ずしも耕地の拡大を伴っていない。すなわち，分家する際の土地獲得方法は，本家の耕地の分割がほとんどである。特に水田については，昭和16年までに水田化された土地がほとんどないほど，適する土地が限定されて




Ⅱ－3図　家屋立地のモデル

いたため，本家の耕地は分家によって細分された形となっている。旧田を中心に土地所有を考察すると全体としては土地の分け方の相互関係はみられない。川本[28]が紫波郡地方で考察したような明確な数字は得られないが，明治30年作製の地籍図[29]によれば，田地は，本家10に対して分家は4の割合となっている。それ以降の分家については，孫分家の旧田の割合が本家の10分の1以下となっている。傾向としては他散居地域と同様に，本家一分家一孫分家と旧田の分けられる割合は減っている。

本家と分家の家屋間の平均距離[30]をみると，本家一分家間が276mと，分家一孫分家間が608mと，旧鷹栖村〔(前注24)〕や，胆沢扇状地[31]の北東部よりは家屋が離れる傾向にある。また，耕地の宅地周辺への集中を，家屋からの距離の200m未満の耕地の70％以上がある場合と仮定すれば，旧農家の66％について現在集中がみられる。

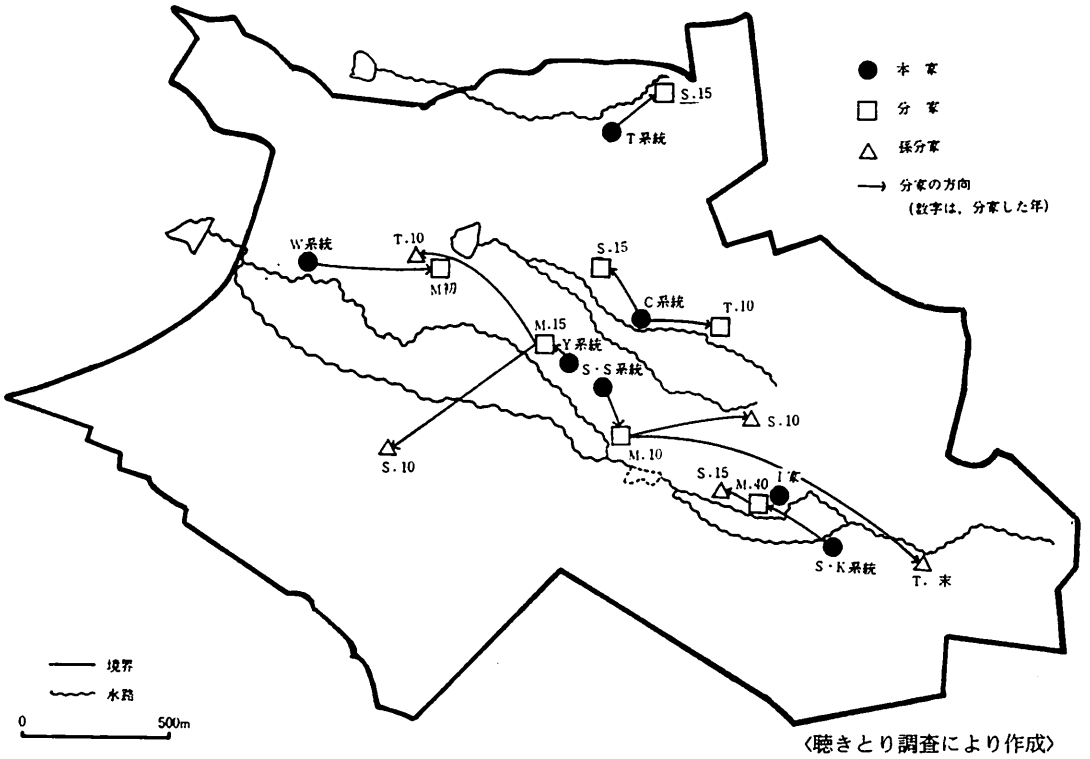
分家を出す方向についても，旧鷹栖村や，大井川扇状地のような傾向はみられないが，概ね以下のように類型化できる。

(a) 水下型（W，S・S，T系統）は，それぞれ家屋，耕地とも水下に分家をもつ。(b) 水上型（Y，S・K系統）は(a)型の逆である。(c) 分散型（C系統）(d) 無分家型（I家）。ここで，(a)，(b)，(c)型について，聴き取りを中心に詳細に考察を進めたい。

（Ⅱ－4図）

(a)型—W系統　明治の初め頃に分家を出した。土地は本家の所有地の水下を4割与えた。家屋は本家と同様に田地の北側の山林に位置し，本家とは350m離れている。現在，この分家は家屋を道路沿いに移転したため，耕地は家屋に集中していない。

(b)型—Y系統　明治15年頃に分家を出した。本家の所有地の中央の旧田を1町程分割した。本家は，




〈聴きとり調査により作成〉

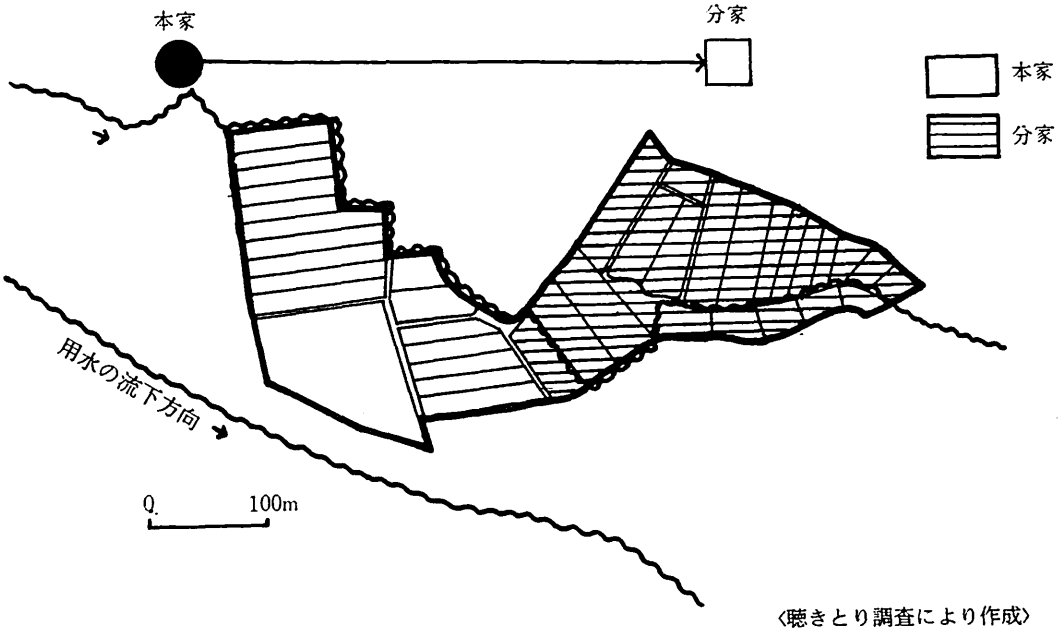
Ⅱ－4図　旧農家の本家・分家の位置

水上側の土地と自宅周辺の耕地を除いた旧田を，約1町分割した。このため本家の耕地は分散した。分家の家屋は，本家に近い所を選択したため，110mと近接している。この分家から，さらに大正10年と昭和10年に孫分家が出，分家の耕地の水上側を，それぞれ10分の1与えられた。しかし，耕地が少ないため，より遠方の土地を開墾し，家屋もそこに立地した。従って，家屋は分家から520m，640mと離れ，耕地も分散している。

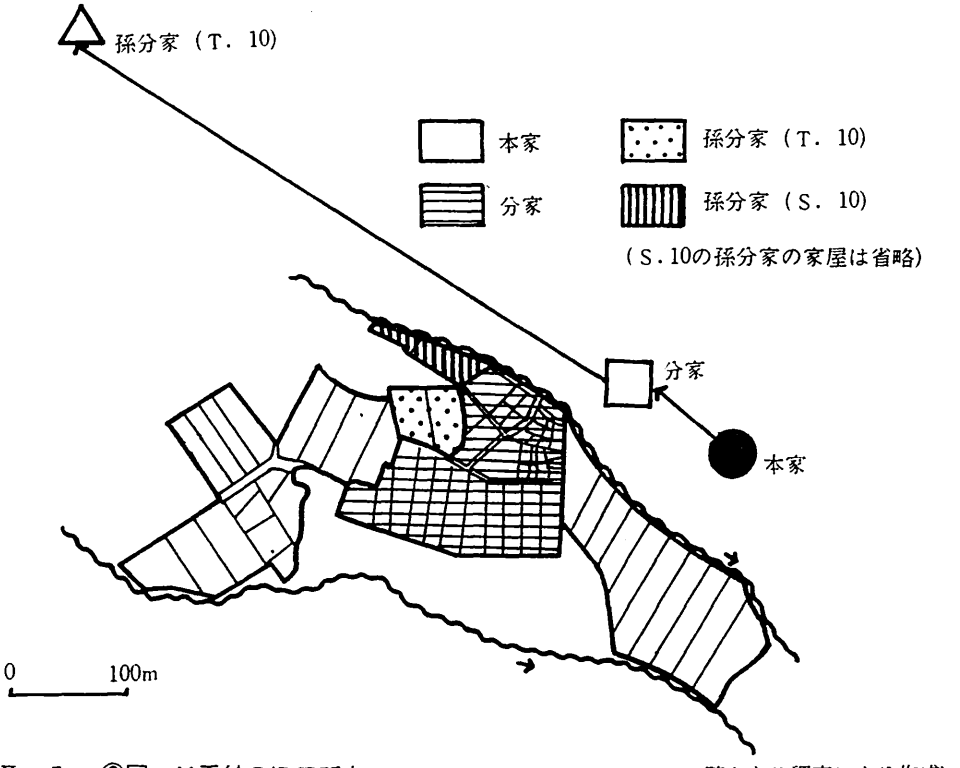
(c)型－C系統　本家は大正10年にはじめて分家を水下に出し，旧田を約4割分割した。分家の家屋は旧田の北側に本家から260m離れて位置する。昭和15年にも分家を出し，今度は水上側に旧田と約2.5割分割した。家屋はやはり旧田の北側で，本家とは220m離れている。この系統は，本家の家屋が旧田の中央に位置し，分家を遠方に出したため，分散型になったと思われる（Ⅱ－5図）。

以上の事例から，大畑平の旧農家における分家の状況は，①本家と同様に田地の北側に家屋を立地する。②本家の耕地の遠方を分割される。③水上の土地は，遠方でも分割されない。すなわち，用水路の重視。④本家より規模は小さい。などがあげられる。これらの結果，本家・分家とも耕地が分散し，家屋も散在したと思われる。

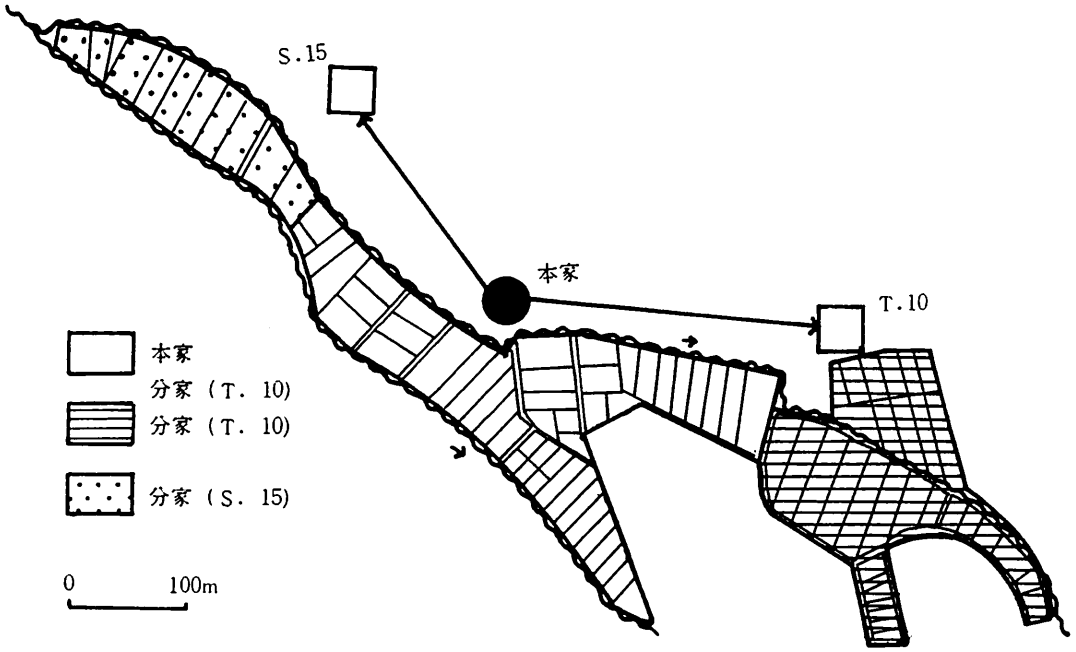
旧農家の所有地は以前の開拓者（飢饉前）の下地があったことや，窪地であった旧田以外はほとんど開田されなかったことなどから，耕地の拡大において果した役割はさほどないと思われる。しかし，その土地所有状態は，現在大畑平という名のつく小字すなわち上大畑平・下大畑平・北大畑平のほとんどを占有している。すなわち別系統の同族が，個々の同族の力で耕地拡大をはかるうちに，近接した2・3の同族，又は単一で，1つの共同体をつくりあげていったと思われる。これは旧鷹栖村[40]における「シマ」からの開拓による散居村の形成過程と類似している。しかし「シマ」が同族によるつながりだけを基盤と




Ⅱ－５－①図　W系統の旧田所有




Ⅱ－５－②図　Y系統の旧田所有　〈聴きとり調査により作成〉




Ⅱ－5－③図　C系統の旧田所有

〈聴きとり調査により作成〉

したのに対し，大畑平での個々の字「シマ」を限定したものは，4つの溜池によって維持された4つの田地（上・下・北大畑平・丑転（うしころばし））であった。

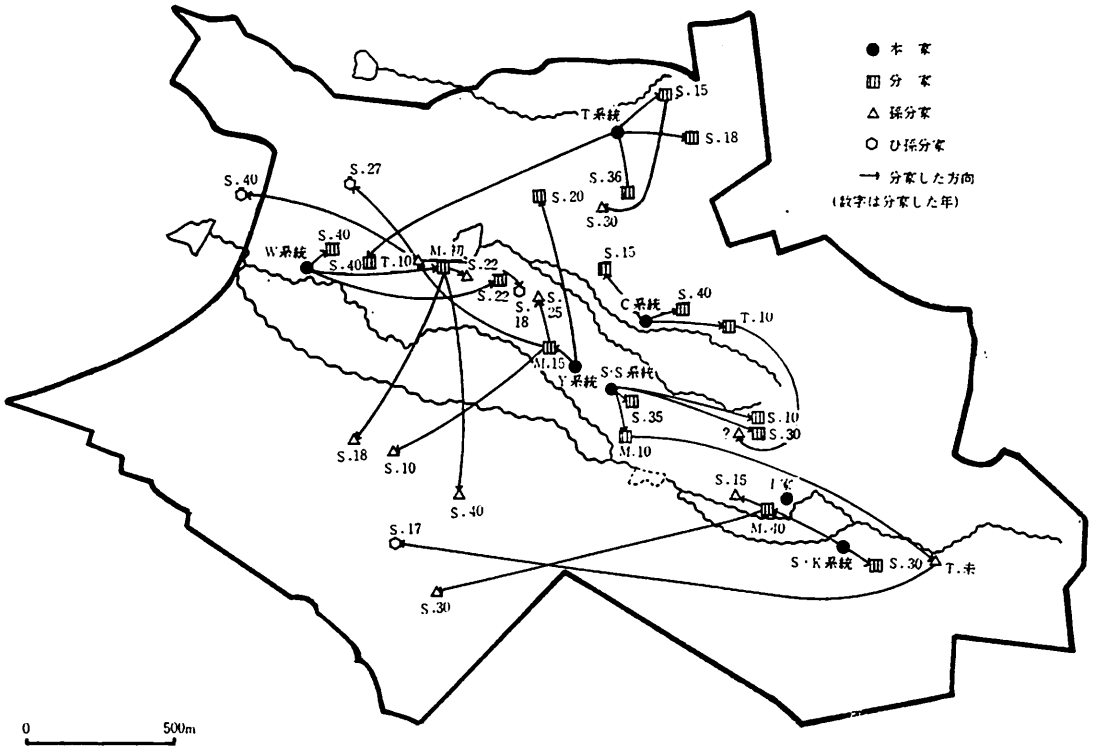
以上から，同族の力と地縁関係が，大畑平の集落形成の重要な要因であったと思われる。

3．昭和16年以降の分家農家

昭和16年からの開畑，戦後の開拓，昭和34年以降の胆沢開拓の影響は，旧農家以外の分家農家に強く現れ，旧農家との相違も顕著である。まず，家屋の平均距離[41]は，本家一分家間387m，分家一孫分家間553m，孫分家一ひ孫分家間793mと，旧農家に比べさらに離れていく傾向にある。新しい分家であるほど，遠く放射状に本家から分散している。大井川扇状地〔前注7)〕のように新しい分家が街道沿いに家屋を立地することもない（Ⅱ－6図）。また，田地の北側に家屋を立地しない場合が出てきた。これらは，旧農家の形成した字内では，耕地の拡大が限界であり，未開墾地を求めるに至ったことを示している。この拡大の方向は，外からの要因（開拓や開田）により不規則になったと思われる。

宅地周辺への耕地の集中は，各農家とも進んでいる。分散している場合は，ほとんどを家屋の周囲に集め，一部が遠方に離れている場合が多い。その中には，開墾地に家屋を立地し，離れている土地は本家から分割された場合と，その逆の場合がある。どちらも耕地の家屋周辺への集中を目的とした結果である。とくに，開墾地に家屋をもつ場合は，本家との接近より，耕地を重視していると思われる。顕著な分散傾向を示す場合は，遠方を開墾したため生じたと思われる。

分家への土地分割の方法は，多岐にわたるようになり，①本家の耕地（旧田）と胆沢開拓による開墾地の組み合わせの場合，②昭和34年以降に開田した田地を分割する場合，③入植地であるが，その土地の前の所有者が本家である場合（縁故入植），④入植者が地元の農家と姻戚関係を結ぶことで入植地と本家の土地を持つ場合，の4類型に区分される。ここで，①と④のタイプについて，聴き取り調査に基づき，考察を加えたい。




Ⅱ－6図　全農家の内，本・分家関係を有するものの家屋位置と分家の方向

〈聴きとり調査により作成〉

①タイプ－t家　　T系統から昭和36年に分家し約2町の土地を本家から分割された。そのうち水田は，低位面の旧田の2反8畝で，残りはほとんど山林だった。胆沢開拓の遂行で，1～2年後に山林も開田した。土地は完全に集中し，家屋は本家から，200m離れている。

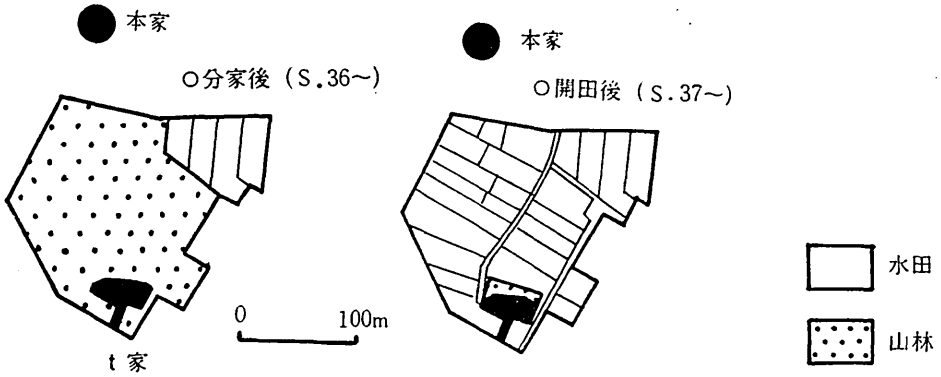
④タイプ－y家　Y系統のひ孫分家である。昭和18年に 3反5畝の畑地を本家から分割され，1町9反は入植地として開墾した。入植地は，中位面の本家に近いところを選んだ。また，分割された土地が他地区であったため，入植地に家屋を立地した。従って耕地は分散した。入植者の組合に加入していたことから，土地の所有や利用の面では入植者と等しいと思われる（Ⅱ－7図）。

以上のように，すでに耕地を限定されつつある分家への土地分散と，胆沢開拓の進行はうまく一致し耕地の拡大化を図るに至った。その手段としては，分家という形ではあるが，その開拓状況は入植者と同様であったと思われる。

4．圏外入植農家

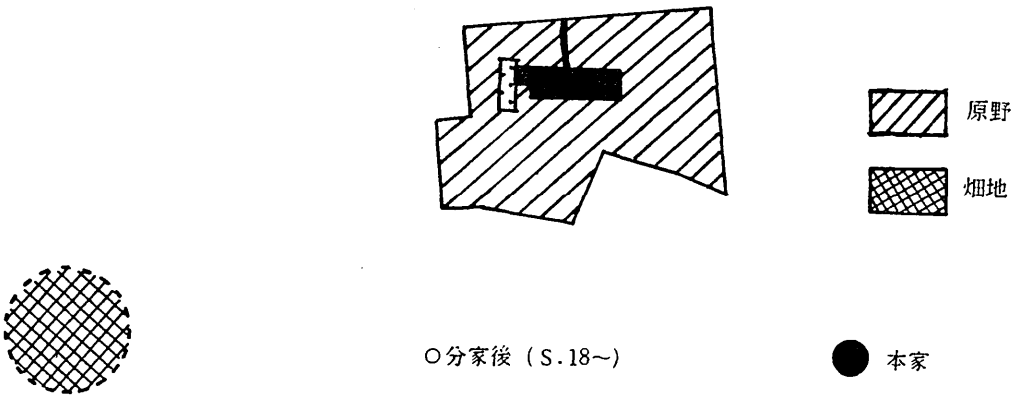
大畑平地区に現在住む人の約半数は大畑平地区以外から昭和21年以降に入植してきた人達である。そこで，ここではこの人達が大畑平圏外の地域から入植してきたことを前提に「圏外入植農家」と以下に称し，大畑平地区の散居の変容を前項に引き続き考察したい。

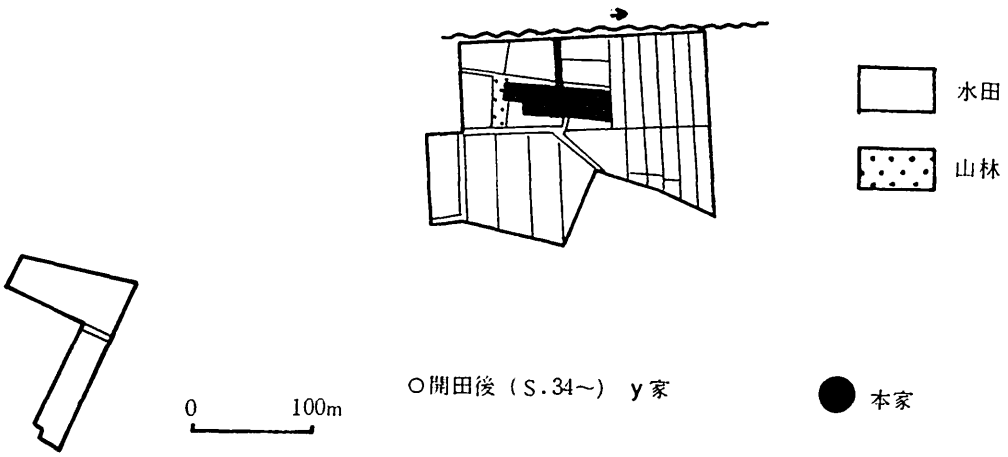
圏外入植農家が入植した地域は，概ね大畑平地区の中でも特に水利に恵まれない地域であり，これは前述の通り旧農家が比較的水利に恵まれた大畑平低位面及び同中位面に入植していたためである。したがって，圏外入植農家はほとんどの農家が大畑平高位面に入植せざるをえず，大畑平中位面あるいは同低位面に入植できた農家でも水利条件や土地条件の




Ⅱ－7－①図　土地所有状況　t 家

〈聴きとり調査により作成〉




Ⅱ－7－②図　土地所有状況　y 家

〈聴きとり調査により作成〉

悪い所を選ばざるをえなかった。これら圏外入植農家の入植地選定は，県の方針と入植希望者間の意見交換でなされた。具体的には，昭和21年圏外入植農家は，県が入植指定地域を決定し，昭和18年に県の方で松林を伐採し，一度機械開墾した造成地域に入植者間の意見を交えて戸別の入植地が決定された。（ただし，入植指定地域外に入植した農家も存する）

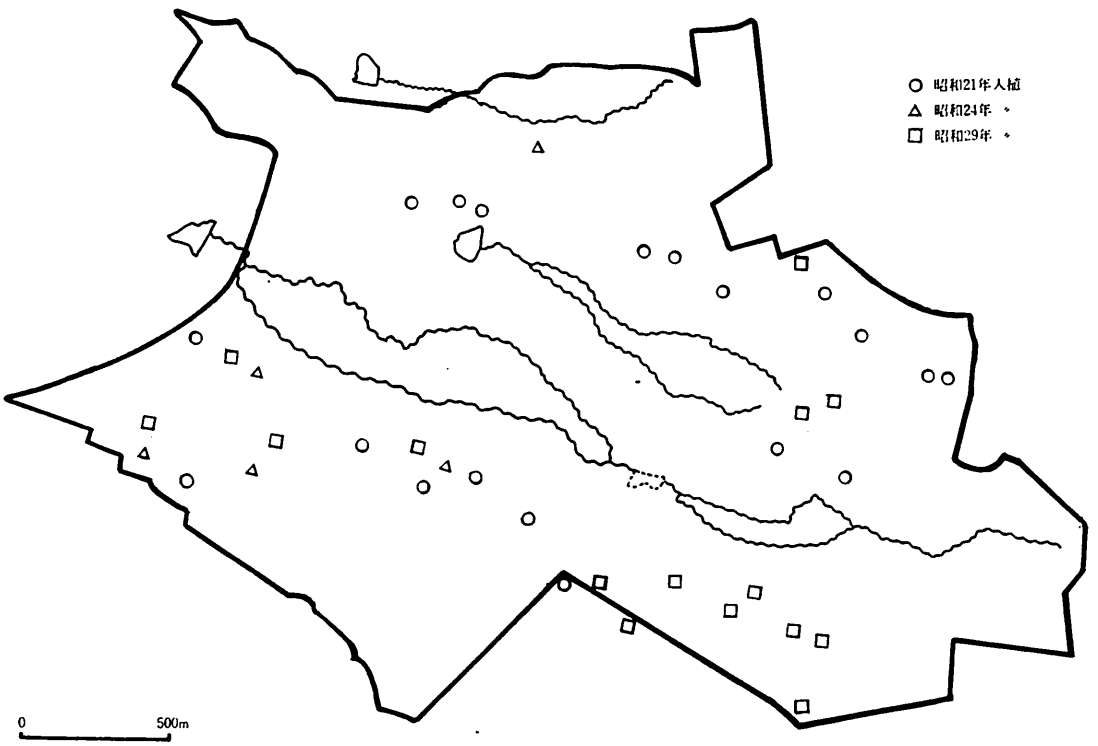
昭和24年以降の圏外入植農家は，昭和21年のそれとは入植の仕方が異なり，昭和21年に現在の胆沢町内に入植して来た農家１２０戸からなる「組織開発営団」の影響をかなり受けた。この組織は，昭和21年圏外入植農家の一致協力を目的とする共同体であるが，昭和24年以降の入植農家に対して，入植地選定の際，県に対して強く働きかけるようになり，営団が入植地の大枠を選出した上で，県が最終的に入植地を決定するという形式となった。

このように，昭和21年と昭和24年以降の入植地選定には様相を異にするものがあるが，県の年度ごとの入植指定地域に概ね入植希望者が入植した結果，年度別入植地域はおおよそⅡ－８図のごとく大別できる。

次に，圏外入植農家の耕地の変遷と，家屋との関連を考察したい。

昭和16年以降の分家農家は，分家当初より耕地を分散的に与えられた農家も多い反面，圏外入植農家は水利に恵まれず，概して貧困で耕作用具にも恵まれなかった点から，家屋の周りの耕作を目指した。ただし「胆沢開拓」期以降，圏外入植農家は家屋の周りのみでなく，家屋からかなり離れた地域を耕作する農家も多くなる。このことをＴ家，Ｓ家，Ｕ家について聴き取りに基づいて考察したい。

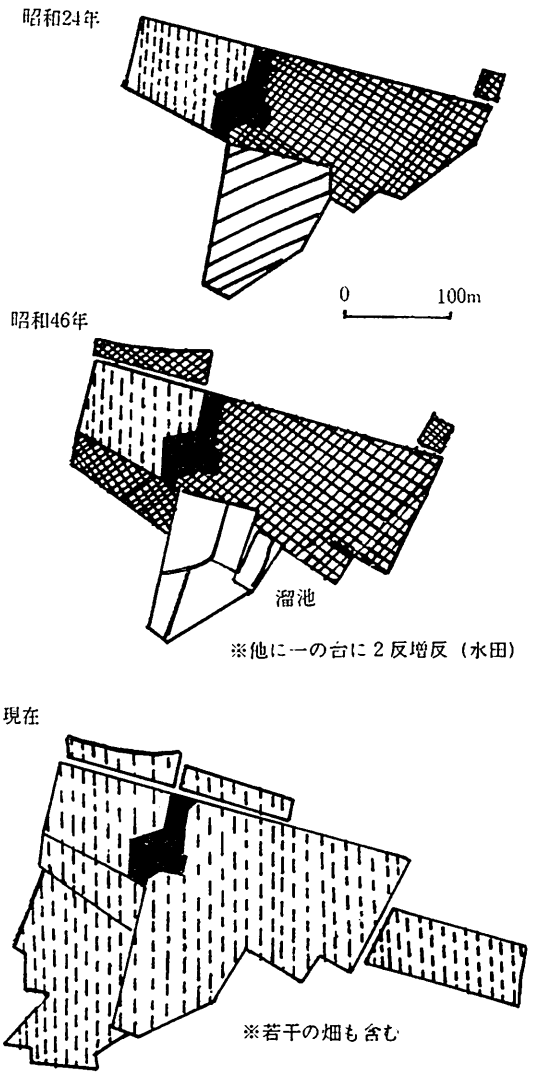
Ｔ家は昭和24年に圏外入植し，まず，Ⅱ－９図のような耕地を手掛けた。畑地は概ね大豆栽培に当てられ，大豆以外の作物も年ごとに品目を変えながら作付けを行った。そして昭和34年の「胆沢開拓」以降，水田整備が進み，自己開田を行ったために水田



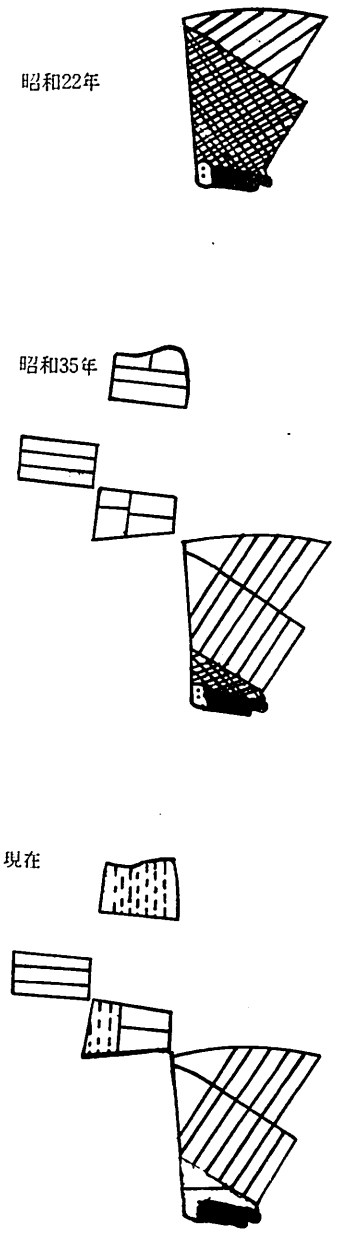

Ⅱ－８図　圏外入植農家の入植年度別家屋分布

が増加した。また，昭和46年には家屋の近くに自己の溜池を掘削したため，水利にはより恵まれた条件となった。ただ，現在は図に見られるように，耕地はより拡大しているが，畜産関係を重視しているため，耕地はすべて牧草地または畑地となっている。（T家は現在「岩手県南酪農組合」に加入すると同時に「小山自給飼料組合」および「西部酪農組合」に加入している。）

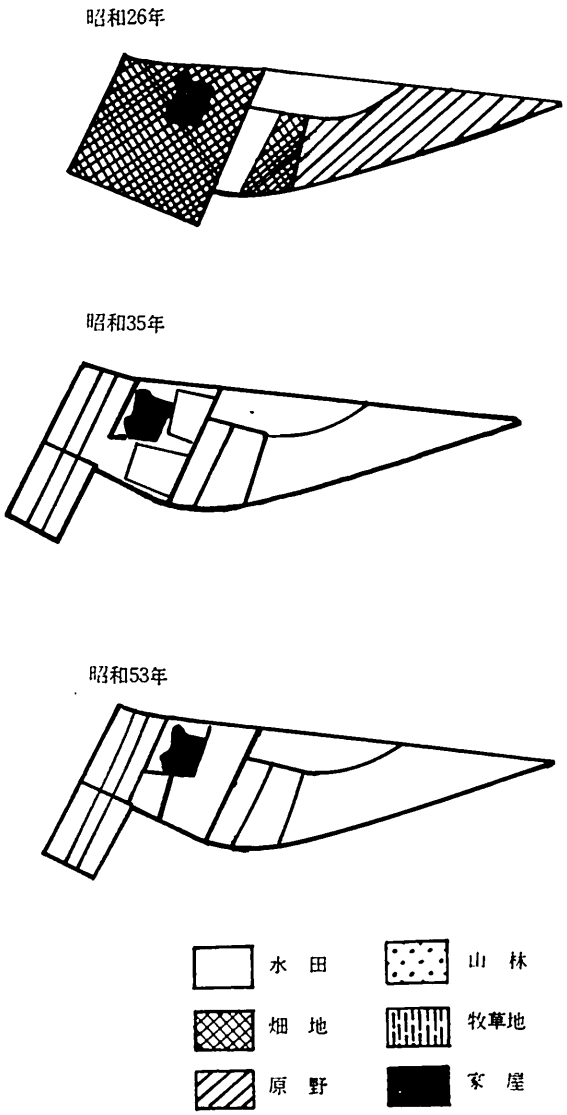
一方，S家は昭和21年に圏外入植した。当初はほとんどが荒れ地であったが，所有地に鍬を入れて昭和34年の「胆沢開拓」までにⅡ－9－②図のような土地利用となった。そして「胆沢開拓」により，活発に水田開発を行った結果，Ⅱ－9－②図のような耕地分散状況に至った。現在の耕地は，減反により土地




Ⅱ－9－①図　耕地の変遷　T家
〈聴きとり調査により作成〉




Ⅱ－9－②図　耕地の変遷　S家
〈聴きとり調査により作成〉




Ⅱ－9－③図　耕地の変遷　U家

〈聴きとり調査により作成〉

利用は変化したが，昭和35年以降耕地面積は変っていない。

また，U家は昭和21年に圏外入植したが，S家同様開拓に努めた結果，昭和26年～27年にはⅡ－9－③図の如くなり，さらに「胆沢開拓」後の昭和35年には水田が著しく増えた。そして昭和40年まで自己開田によって水田を増加させたが，現在では減反政策によりⅡ－9－③図の如くの土地利用となっている。

また，現在の耕地の分布状況をみると，耕地の宅地への集中は，入植農家の71％と，高い値を示している。

以上を考察すると，「胆沢開拓」は農家における耕地増反，耕地分散，土地利用という3つの面で及ぼした影響は著しく，「胆沢開拓」以降の農業経営構造とも相まって，散居集落の景観変遷に関与したことは重要であろうと思われる。

## Ⅲ　散居形態に関する一考察

第Ⅱ章では大畑平の集落形成について考察してきた。本章では，大畑平における耕地の分布状況，農業経営構造ならびに現在までの農家間の結びつきを散居形態との関連において明らかにしたい。

### 1．現在の耕地の分布

散居を考察する上で，耕地の集中・分散は重要なポイントになると思われる。そこで本節では，現在の耕地の集中・分散の様子を資料の分析から考察したい。

Ⅲ－1図は，縦軸に家屋の中心からその農家の持つ団地の中心地までの距離を，横軸に団地の総耕地面積に占める割合をそれぞれ表示したものである。たとえば，ある宅地中心から距離200mのところに総面積の22％の耕地がある場合，縦軸200～299m，横軸29～20％のところへ表示されているというごとくである。それを，大畑平全農家[32]，本家・分家農家，入植農家について検討してみたい。また，考察を加える上で，次のようにA～Fの類型分けを試みた。

Aタイプ…集中型，Bタイプ…やや集中型，Dタイプ…近距離分散型，Eタイプ…遠距離分散型とした。ここで，我々の定義した集中は，A＋Bの範囲である。そして各タイプにおける団地数と面積を割合で示したのがⅢ－1表である。

耕地の集中については，全体を見るとA＋Bの範囲は全団地数の約31％が集まっているが，面積の割合を見ると61％にのぼる。また，Dは約31％の団地が集まっているが，面積を見るとわずか10％である。また，D・Eに着目すると，団地数の半分がこ

耕地面積（%）

| 距離（m） | 100 | 99～90 | 89～80 | 79～70 | 69～60 | 59～50 | 49～40 | 39～30 | 29～20 | 19～10 | 9～1 | 0 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0 | A | | | | | | | | | | | |
| ～ 99 | | B | | | | | | | | | | |
| 100 ～ 199 | | | | | | | C | | | | D | |
| 200 ～ 299 | | | | | | | | | | | | |
| 300 ～ 399 | | | | | | | | | | | | |
| 400 ～ 499 | | | | | | | | | | | | |
| 500 ～ 599 | | | | | | | | | | | | |
| 600 ～ 699 | | | | F | | | | | | | | |
| 700 ～ 799 | | | | | | | | | | | E | |
| 800 ～ 899 | | | | | | | | | | | | |
| 900 ～ 999 | | | | | | | | | | | | |
| 1,000 ～ | | | | | | | | | | | | |

Ⅲ－１図　耕地の分散集中の類型

＜農家台帳より＞

Ⅲ－１表　耕地分布状況

| | A | B | C | D | E | F |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 本家 | 15% | 10% | 17% | 35% | 21% | 2% |
| 分家 | 34 | 20 | 19 | 12 | 11 | 4 |
| 入植 | 24 | 12 | 17 | 28 | 17 | 2 |
| 農家 | 47 | 21 | 14 | 8 | 7 | 3 |
| 全体 | 20 | 11 | 17 | 31 | 19 | 2 |
| | 42 | 19 | 17 | 10 | 8 | 4 |

上段　田地数での割合
下段　面積の割合

＜農家台帳より作成＞

の２つの型に含まれていることがわかる。つまり，大畑平の全耕地面積の６０％以上が 宅地周辺に集中していること，面積の小さい団地がかなり存在していることを示していると考えられる。また本家・分家農家と，圏外入植農家とを比較してみると，前者はＡ＋Ｂの範囲では全団地数の25%が集まっているのに対し，後者は３６％が集まっている。また耕地面積を見ると，本家・分家では５４％の集中に対して，入植者は６８％と集中率が極めて高くなる。C～F に関しては，さほど差はないが，Ｄ・Ｅをみると，本家・分家農家の方が団地数の割合が少し高くなっていることから，若干の分散傾向があると考えられる。また，ＣとＦにおいては，団地数の割合は同じであるが，面積の割合を見ると，圏外入植農家が若干低くなっている。つまり，Ｃ・Ｆにおける１団地当りの面積は，圏外入植農家の方がわずかに細分化の傾向があると思われる。

次に，団地数の平均値を取ってみても，本家・分家農家が2.5団地であるのに対して，入植は2.1団地になっており，前者の方が団地数が多い。

以上により，圏外入植農家は本家・分家農家に比して家屋周辺の集中率が高いために，分散する団地の面積が小さいことが考えられる。

それに対して，本家・分家農家は，集中率の面では低いが，分散する団地の面積は，圏外入植農家に比べてやや広いように考えられる。

以上の理由としては，次のことが考えられる。すなわち，本家・分家で集中率が低い原因としては，

本家から分家への土地の分割に伴う耕地の細分化や開墾・増反などにより団地数が増えたことが，また入植農家に集中が高い原因としては，入植の際の耕地配分が1カ所にまとまっていることや，入植する際の耕地開墾を行うために宅地を耕地の中心におくことなどが考えられる。また，圏外入植農家の分散している耕地に対しては，「胆沢開拓」にともなう増反，開墾，耕地整理の影響，またその後の増反などが考えられる。

耕地の分布については，明確な傾向を把握することは困難である。しかし，現在のかかる耕地分布が農家経営に少なからず影響していると思われる。そこで次節では農家経営の構造について考察していきたい。

## 2．現在における大畑平地区の農家経営構造

本節では，大畑平が現在いかなる農家経営構造であるかを考えてみたい。昭和34年に入ってから開始された「胆沢開拓」によって大畑平は開田が進行し，その景観は従来の畑地から大幅に変化していった。しかし昭和53年以降の減反政策の段階に入ると，農家はその経営の転換を再び余儀なくされている。そこで現在の大畑平の農家の特色を考察してみたい。

まず，経営耕地面積の多い割に農家収入が少ないことがうかがえる。たとえば，大畑平における専業農家の平均耕地面積は53ha，収入は3,570千円である。これは全国（北海道を除く）における専業農家の平均耕地面積1.8ha，収入3,277千円[34]と比較すれば顕著な格差がみられる。おそらく大畑平の地味の悪さ，そのためにより広い耕地が必要であったことが推定される。このことは大畑平の家屋密度の極端な低さや，耕地の分散とも関係していると思われる。

耕地面積の中では水田が一番多いが，水田は約1haが減反されている反面，牧草地が約0.5ha増えている。すなわち，減反政策により水田から畑地や牧草地に転作されたものと考えられる[35]。つまり，この地区の今後の農業の発展を考えるうえで畜産は重要な意味を持っていると言える。

次に，大畑平は本家・分家農家と圏外入植農家とに大別できるが，本家・分家農家の方が耕地面積が広く，その中でも旧農家が著しく広くなっている。（Ⅲ－2表）。この理由として，旧農家が比較的地味のよい耕地を多く持っているため，経営規模を拡大するうえで経営基盤が安定していたことが考えられよう。これは旧農家が水田を多く持っていることからもうかがえよう。しかし同じ本家・分家農家の中でも昭和16年以降の分家農家では，その経営形態において，程度の差こそあれ圏外入植農家と同様な傾向を示している。このことは，本家からは確かに分家に際して若干の土地を与えられるが，原野を開墾していくのは他の入植農家と同じであるために，経営も類似した方針で行わなければならなかったことを意味していると思われる。これを顕著に示しているのがⅢ－2図の家畜の経営状況である。

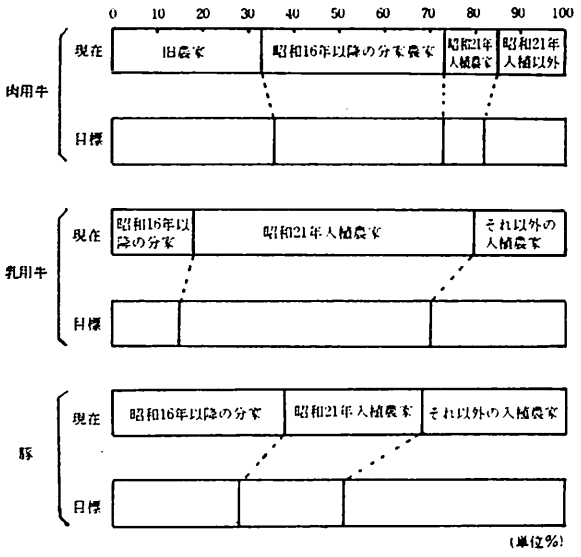
大畑平は8割以上の農家が何らかの家畜を飼育しているが，Ⅲ－2図は本家・分家農家と入植農家が飼育している家畜の種類とその割合を示している。すなわち，旧農家は肉用牛のみを飼育しており，その平均頭数でも昭和16年以降の分家農家に比べると，必ずしも多くない。また，乳用牛においては，昭和21年の圏外入植農家が，養豚においては昭和21年の圏外入植農家が多くなっている。つまり，旧農家は水田を中心に家畜を付随的に経営しているのに対して，入植農家並びに昭和16年以降の分家農家は水稲と家畜を半々もしくは家畜に経営のウェイトをかけていると考えられる。このように大畑平では肉用牛・乳用牛・豚の3種が扱われているが，力点を置く品目が異なるのは大変興味深い。これは数多くの農家組織があること，経営構造の相違[36]などが複雑に絡み合っているためと推定される。

次に大畑平の農家は，全体的にみて営農意欲の高いことがうかがえる（Ⅲ－3図・Ⅲ－2表）。たとえば収入面において農家収入が農外収入をうわまっている。また，現在の経営状況をみても，専業と第一種兼業を合わせると50％を超え，全国平均に比して極端に高い。経営目標も全体の約29％が専業をめざしているのに対し，第二種兼業が全体の約25％で

Ⅲ－２表　大畑平における耕地利用状況

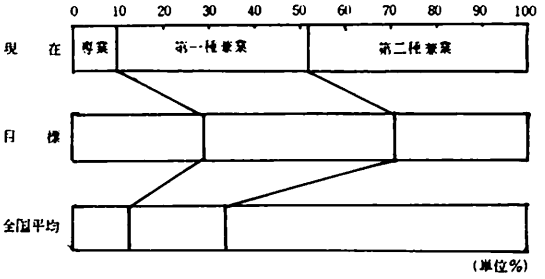
| | | 水　田 (ha) | 普通畑 (ha) | 牧草地 (ha) | 計 (ha) | 水　稲 (ha) | 牧　草 (ha) | 農業収入 (千円) | 農外収入 (千円) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全　体 | （現在） | 2.41 | 0.09 | 0.3 | 2.8 | 1.5 | 0.9 | 1,685 | 1,369 |
| | （目標） | 2.41 | 0.09 | 0.3 | 2.8 | 1.5 | 1.0 | 2,090 | 1,089 |
| 本　家 | （現在） | 2.8 | 0.13 | 0.2 | 3.13 | 1.9 | 1.1 | 1,453 | 1,030 |
| 分　家 | （目標） | 3.0 | 0.13 | 0.2 | 3.33 | 1.9 | 1.2 | 2,477 | 292 |
| 旧農家 | （現在） | 3.9 | 0.09 | 0.2 | 4.19 | 2.5 | 1.1 | 2,436 | 801 |
| | （目標） | 3.8 | 0.09 | 0.2 | 4.09 | 2.4 | 1.3 | 3,124 | 551 |
| 旧　農 | （現在） | 1.8 | 0.15 | 0.3 | 2.25 | 1.4 | 1.0 | 1,787 | 1,211 |
| 以　外 | （目標） | 2.3 | 0.15 | 0.3 | 2.75 | 1.4 | 1.1 | 2,231 | 877 |
| 入　植 | （現在） | 2.2 | 0.07 | 0.4 | 2.67 | 1.3 | 0.7 | 1,847 | 1,642 |
| 農　家 | （目標） | 2.0 | 0.07 | 0.4 | 2.47 | 1.2 | 0.9 | 1,821 | 1,604 |
| S 21 | （現在） | 2.12 | 0.12 | 0.43 | 2.67 | 1.3 | 0.8 | 1,493 | 1,507 |
| 入　植 | （目標） | 2.05 | 0.12 | 0.46 | 2.61 | 1.2 | 1.0 | 1,810 | 1,256 |
| それ以外の入植 | （現在） | 2.23 | 0.04 | 0.3 | 2.59 | 1.3 | 0.7 | 2,071 | 1,728 |
| | （目標） | 2.01 | 0.04 | 0.3 | 2.36 | 1.3 | 0.8 | 1,828 | 1,825 |

＜胆沢町役場農林課資料「推進農家調書」より作成＞




Ⅲ－２図　家畜経営状況

〈推進農家調書より作成〉




Ⅲ－３図　農業経営状況

＜推進農家調書及び農業白書55より作成＞

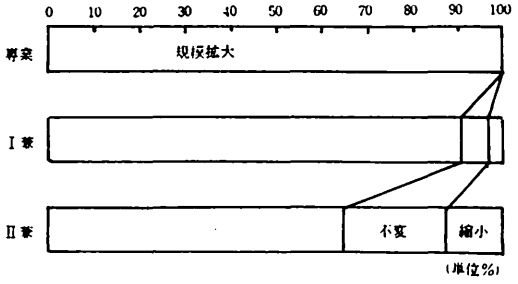
あることは，全国平均から推しても農業に対する意欲の高さがうかがえる。その経営規模拡充の方法としては，耕地面積は変化していないのに収入は伸びている，水稲面積が減るかわりに牧草地が増えていることなどから，水稲作よりも畜産に力を入れていると考えられる。また近年３年間の冷害によって水稲中心農家は大打撃を受けたのに対し，家畜を主に

している農家は比較的被害が少なく[37]，このことも家畜と水稲の複合経営を増加させる一要因として考えられそうである。

大畑平の農家は，全体的にみて確かに営農意欲は高いといえる。しかし逆に農業を事実上やめている人や，将来やめようと思っている人も存在する。Ⅲ－4図が示すごとく，専業農家は完全に規模拡大をめざしているが，第一種兼業・第二種兼業農家では現状維持や規模縮小が多くなる。これは耕地面積が少ない，別の方面（たとえば畜産やピーマン）へ規模を拡大するには資本不足である。農業を行うよりも，他の職業に就く方が生活が安定する，後継者がいないためにやめる，などがその理由として考えられる。このような農家は耕地面積が0～1.5ha 前後の農家に多く，2ha以上の農家では規模拡大の意欲がうかがえる。すなわち1.5ha ～ 2 haの間が，経営意識を決める一つの目安ともいえる。また第二種兼業や規模の縮小は圏外入植農家に多い。これは旧農家と比べて入植農家の地味の悪さが考えられそうである。

Ⅲ－5図は後継者の状況を示しているが，専業・第一種兼業農家ではかなり後継者が決っているのに対し，第二種兼業農家では決っていない家が多い。特に，規模縮小の農家はほとんど決っていない。これは，農業から他の職業への移行を示しているように思われる。

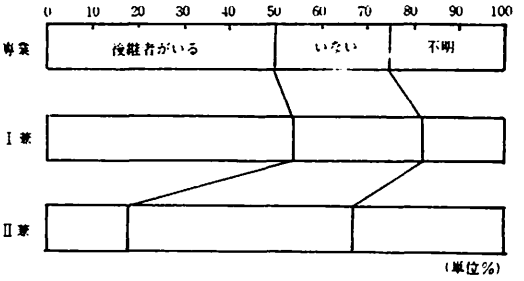
大畑平における機械化は，昭和30年に入ると耕耘機が登場し，トラクター・バインダー・田植機などは約10年前ころから導入されはじめた。それ以前は




Ⅲ－4図　今後の営農意欲

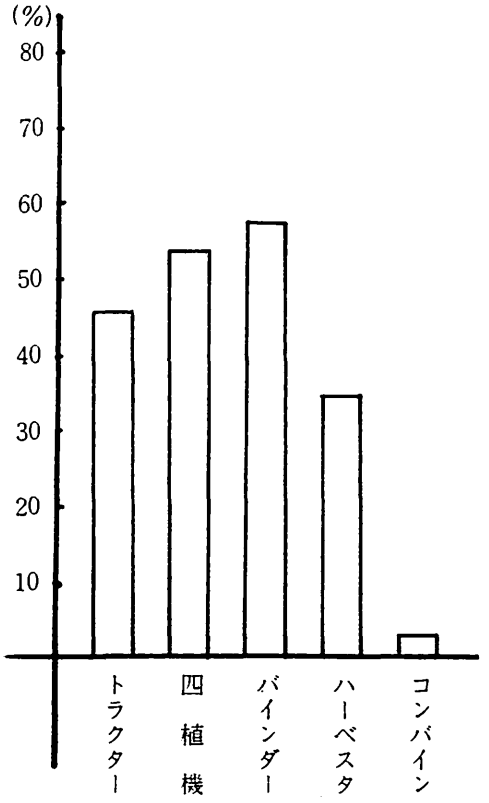
〈推進農家調査より作成〉

「手間」とよばれる日雇いを頼んだり「よいっこ（結）」を行ったりしていたが，機械が導入されるにしたがい，それらは徐々に消えていった。Ⅲ－6図からもわかるように田植機とバインダーは普及率が高いのに対して，ハーベスタはかなり低い。これは自然乾




Ⅲ－5図　後継者状況

〈推進農家調査より作成〉




Ⅲ－6図　機械利用状況

〈推進農家調査より作成〉

燥法の一つである「ほうぎょ」[38]が残っているためとも考えられる。コンバインについては，その普及率が大変低くなっているが，飼料を取るのに不適当であるためと言われている。

これらの機械導入の当初は共同購入が多かったが，徐々に個人購入が増加してきた。Ⅲ－6図は昭和55年の資料に基づいたため普及率は低くなっているが，現在はもっと普及しているものと推定される。

大畑平の現在の農業経営に関する考察は以上のごとくであるが，これらの農家を類型分けすると次のようにまとめられる。

aタイプ …… 水稲中心経営向上型

このタイプは水稲による単一経営かもしくは家畜と水稲の複合経営であるが，水稲の方にウェイトがかかっており，旧農家の本家に見られる。

bタイプ …… 畜産中心経営向上型

このタイプは，畜産に経営のウェイトを置いている。昭和16年以降の分家農家・圏外入植農家に比較的多く，この2つの集団に含まれている者の中で，規模拡大をめざしている農家は大抵このタイプに含まれる。

cタイプ …… 現状維持型

このタイプは，耕地面積がさほど広くなく飼育頭数も少ない。また農業収入も農外収入とさほど格差がないか，もしくは農外収入が上まわっているもので，旧農家を含めた分家農家・圏外入植農家に多い。

dタイプ …… 経営縮小型

このタイプは，耕地面積・飼育頭数がともに少なく，農業収入も低下している。このタイプは圏外入植農家に多く，中には農業収入を0にする人や，極端に低い人もいる。

以上のようなことが，現在の大畑平の農業の特色として考えられる。この農業経営構造については，散居の形態とは直接の関係はないように思われる。しかし，耕地利用や経営形態においては，旧田を持つ旧農家と原野を開拓した入植農家では大きな相違がみられる。すなわち，今現在に至るまでの耕地の開拓，所有，土地利用の変遷が，農家経営に深い関係を持つと考えられるので，生活空間としての散居形態は大畑平の農業経営面にも重要な要素として位置づけられよう。

### 3．村落の社会的紐帯および営農組織

大畑平において，旧農家間ではかっては溜池の使用という点で，一つの結びつきがあった。また，新しくは 昭和16年以降の分家および圏外入植農家の間には，営農組織の結成という側面から生産面での結びつきがみられる。

ここでは，溜池使用および営農組織結成による結びつきを中心に，その他の結びつきについても考察したい。

：旧農家の共同体的結合

旧農家間の紐帯をみると，まず生産面については溜池の使用が挙げられる。聴き取りによれば，4つの溜池（土手渡池，ガツゴ池，浮上池，専太郎堤）は，1～3軒の本家及びそれぞれの分家の間で共同使用されていたことが確認できた。土手渡池は3軒の旧農家と各旧農家から 昭和16年までに分家した7軒の農家の11戸で共同使用していた。ガツコ池は3軒の旧農家とそのうちの1軒から昭和16年までに分家した2軒の農家の5戸で，浮上池は1軒の旧農家とそこから昭和16年までに分家した2軒の農家の3戸で，さらに専太郎池は1軒の旧農家と，そこから昭和16年までに分家した1軒の農家の2戸で，共同使用されていた。これらは，いずれも「胆沢開拓」以前に慣行として存在していた水利である点を考えると，より強固な紐帯であったものと推定される。

一方溜池の使用以外で旧農家間の紐帯を示すものには，狼よけのため衣川方面より「三嶺神社」を勧請したこと，例年9月19日と 正月に祭礼を催していたことなどが挙げられる。

：圏外入植農家を中心とした営農組織

営農組織については，昭和16年以降の分家農家および圏外入植農家の間で多くの結成例がみられ，そのほとんどは入植年代ごとに作られたものである。

営農組織の事例としては，昭和21年に水沢から入植して来た農家を中心に結成された「水沢小山開拓者同盟」，昭和21年の分家農家で結成された「大畑

平開拓組合」，昭和29年の入植農家の間で結成された「29年開拓組合（一の台開拓組合）」などがあり昭和29年の入植農家は「水沢小山開拓者同盟」か「大畑平開拓組合」に加盟した。しかしこれら諸組合すべては，昭和30年頃「小山開拓組合」に統一されてからは肥料や家畜の積極的導入を目指し，農業協同組合的活動を行った。後にこの「小山開拓組合」は個人もしくは共同による農業機械購入ブーム，およびそれにともなう近隣間のグループ活動化で昭和40年頃自然消滅したが，入植農家間の組織という点では注目される例であろう。

また圏外入植農家において注目されるのは，昭和21年の入植農家間で「気仙班」という組織をみたことである。「気仙班」は国からの補助金を目的とした組合とは異なり，昭和21年における圏外入植農家の精神的つながりを重視する組織であり，入植当初の厳しい生活の中で一致協力を目指した点が特色である。班の構成員は消長をみるが，現在は12戸から構成されており，結成当初は資金の融通を班員で行っていた。

次に大畑平の全農家を対象とした営農組織としては，「小山開拓組合」解体後の諸生産組合が挙げられ，昭和45年以降に現れた畜産関係の組織や，現在に多くみられるピーマン，その他の生産組合などがある。

最後に，農作業に関して最小の結びつきと思われる「よいっこ(結)」について事例を挙げ，「よいっこ(結)」と「手間」との関連についても述べたい。

まず，旧農家は「胆沢開拓」により開田が進む以前に「よいっこ(結)」を行っていた農家が多くみられる。しかし，その方法は3～4戸の近隣農家および親戚の間でなされ，しかも農作業の遅れた農家を手伝うというもので，一般的な結とは異っていた。「よいっこ(結)」を行っていた時期は個々の農家により差があるが，開田により水田面積が増加し，機械耕作が進むにつれ，徐々に「よいっこ(結)」は姿を消して行った。これと対照的に「手間」は「よいっこ(結)」が行われなくなるにしたがい，旧農家の間で盛んに頼まれた。ただし，「手間」も農業機械が以前にも増して多く購入されるようになると，徐々に姿を消していく。

一方，聴き取りによれば，昭和16年以降の分家農家および圏外入植農家の間では，開田が進むにつれて「よいっこ(結)」を行った例がみられるが，現在では「手間」を頼む農家も少なく，機械化により，農作業の共同活動および「手間」は少なくなっている。

以上から大畑平の社会的紐帯および営農組織についてみると，旧農家は古くから溜池の共同使用に関してより強固な結びつきの存在が推定される。これに対し昭和16年以降の分家農家及び圏外入植農家に関しては，営農組織という形で結びつきがみられた。そして生産組織として新しい「小山開拓組合」解体後は，諸組合の結成により，大畑平の全農家が新たな結びつきを目指した点が特色であろう。

また，「よいっこ(結)」と「手間」については，水田開発および機械耕作が進行する以前は，家屋の散在や耕地の所有状況から「よいっこ(結)」を行うより，「手間」を頼む方が合理的であったことが推定されるし，「よいっこ(結)」と「手間」が行われなくなった最大の要因は，農業機械購入に求めることができよう。

## Ⅳ　他地域との比較　—結び—

これまで第Ⅱ章，第Ⅲ章において散居である大畑平を多面的にとらえ考察を加えてきた。本章においては，標式的な散居といわれる砺波平野の旧鷹栖村を取りあげ，大畑平との多角的な比較を通じて分家状況，耕地の様子，水路と社会構造などについて考察を加え，まとめとしたい〔前注24)〕。

比較対照の事例として取り上げる旧鷹栖村は，面積27.1㎢で，庄川扇状地の末端に近いところに位置している。このあたりは，庄川が運搬してきた礫が約20m の厚さで堆積した上に壌土が薄くのっているというそれほどめぐまれた土壌ではなかった。そのために水田化はかなり遅れ，水田化できない土地はまず畑として開拓された。また全般的にこの地区は用水の滲透が激しいため，常に給水が必要であ

った。このように地味的にはあまり恵まれていなかったが，庄川の水量は豊富であり，平地部の降水量や温度が稲作には適当であったため，この地区一帯は水田単作地帯となっている。

(1) 本家・分家

旧鷹栖村では，分家する者には一様に耕地を分け与えている。その広さは広くても本家の1／10，普通はそれ以下であった。また分与される田は，本家からの飛地が多かった。それに対して，大畑平では本家の耕地の割合を10とすると，分家は4，孫分家は1以下と徐々に耕地の分与される割合が減ってくる。分家に対して40%の土地を分けている理由としし，本家が広い耕地を持っていたことが考えられる。またそれに関連して家屋相互の距離について，旧鷹栖村では60～300mに72.4%の分家があるのに対して，大畑平では本家・分家の平均距離が276m，また分家・孫分家の間は608mであり，大畑平の方が家屋距離がある（Ⅱ－6図参照）。

分家を出す方向についても旧鷹栖村では，本家の水下に出すのに対し，大畑平では，本家によって出し方が異っており，一般的傾向はみられない。

(2) 耕地と耕作品目

耕地の集中に関しては，旧鷹栖村が集中率ほぼ100%である。大畑平においてはそれが60%と低くなる。しかし旧鷹栖村でも分散している例がありそういう場合は耕地の交換を行い，宅地の回りに耕地を集めようとする動きが見えたが，大畑平ではあまりみられない。これは，旧鷹栖村の開拓が時期的に早いため，農業機械も発達しておらず，経営を円滑に行う手段として耕地を集中したと考えられるのに対し，大畑平は開拓も新しく，農業機械もかなり発達していたため，交換というむずかしい手段を使わずとも，かなり円滑に経営できるようになったためと思われる。

耕作品目についても，旧鷹栖村は水田単作地帯であるが，大畑平は水田が少なく，胆沢開拓以前は旧田を除いてほとんど原野かあまり地味のよくない畑であった。「胆沢開拓」以降水田が増えたが，水利問題から畑地や牧草地のままの耕地もかなりあった。現在は減反政策により，大畑平は牧草地や畑地に，旧鷹栖村ではチューリップや他の畑作物に転作していっている。この違いは，前者は古くから畜産を行なってきていること，地味が悪いため作付品目が限定されていることが，後者については，長い間の開拓によって地味が徐々によくなってきたこと，気候的に恵まれていることなどがそれぞれ考えられる。

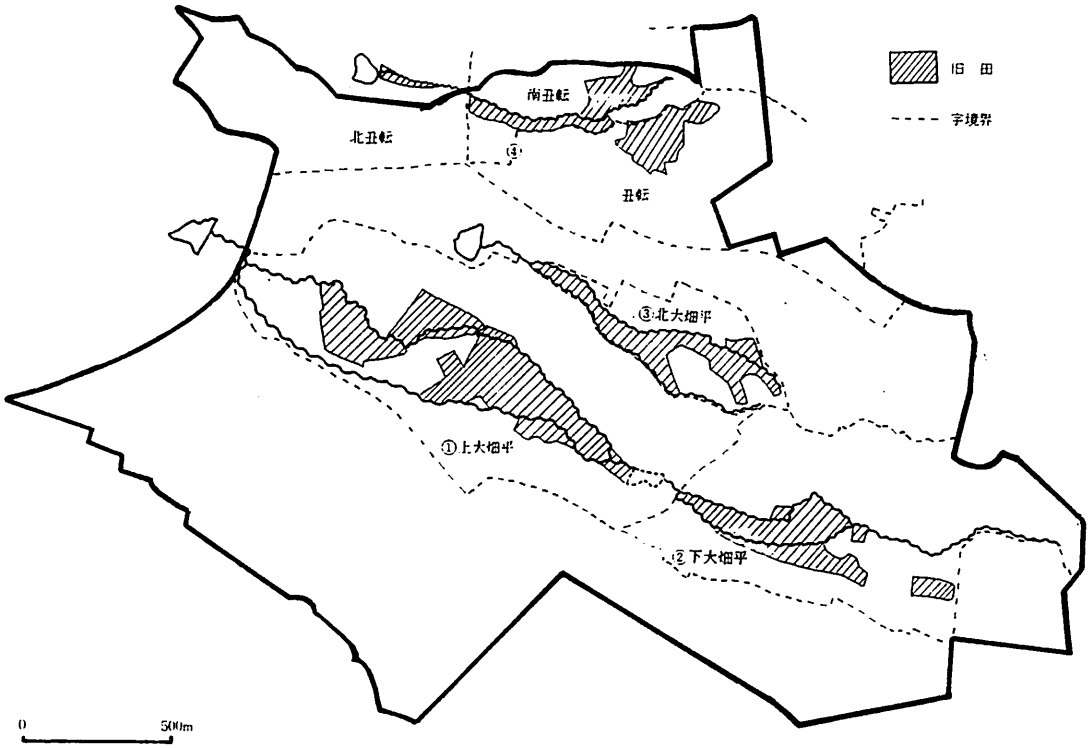
(3) 水　路

水路に関しては，旧鷹栖村には鷹栖口用水・二万石用水があるが，これは加賀藩の水田奨励と農民の努力によって完成された。その後，この用水の取り入れが困難なことから，数多くの改良事業がなされ昭和28年に その整備が一応完了する。大畑平はその点で開発が遅れており，現在の旧農家が入植してきた当初から「胆沢開拓」がはじまるまでは，天水による溜池が唯一の水源であった。現在は国営の水路が通っているが，水不足の時には水路を使用する農家で水を入れる時間を決めるという状態である。水の管理についても，旧鷹栖村では用水の清掃を農家非農家関係なく行なうことになっていたが，大畑平では溜池の水路を使用している農家がその管理を行なっている。

(4) 社会構造

大畑平の旧農家の社会構造については，水利が重要な意味を有したと思われる。Ⅳ－1図を見ると，大畑平には4つの溜池がそれぞれ，①土手渡池＝W系統・Y系統・S.S系統，②ガツゴ池＝S.K系統・I家　③浮上池＝C系統　④専太郎堤＝T系に利用されていたことがわかる。そして，これは現在の小字と一致している。すなわち，①は上大畑平，②は下大畑平，③は北大畑平，④は丑転となる。そして当然ながら，耕地もその小字内に分布している。つまり，大畑平は，それぞれ水路に沿ってやや列状村的な傾向が見られ，それが血縁および地縁によって結びついていたと思われる。これは，旧鷹栖村が血縁を基盤にした「シマ」によって開拓をすすめていき，どちらかと言えばシマ内の個々の結びつきが薄いと考えられるのに対し，大畑平は血縁のみならず他系統との結びつきによっても，生活基盤をともにしていたといえる。

以上により考察すると，大畑平の旧農家は，集散




Ⅳ－1図　旧田と字の分布状況

折衷型の発達をとげてきたと考えられる。そして，これらの字全体を結びつけるものとして，旧農家がまつった三嶺神社がその機能を果していたと思われる。

その点，圏外入植農家については，入植以前の出身地によるつながりや，入植後にできた開拓組合などによるつながりが現在まで続いている。現在大畑平には数多くの組合があるが，それらが上記の2つの結びつきの影響を多分に受けていることは否めないと思われる。

旧鷹栖村と大畑平を散居という共通部分から比較を試みたが，かなり異なる要素が多かった。その理由として，自然条件の違い，開拓年代の違い，それに伴う入植のやり方の違いなどが考えられる。これらの影響を強く受ける中で，現在の「大畑平」が成立してきたように思われる。

## おわりに

以上のように，我々は従来の胆沢扇状地の広範な地域における散居研究の段階から，小地区を抽出し他地域と比較することによって散居形態の意義を明確にするための事例として大畑平を取り上げた。旧鷹栖村との比較において相似点・相違点がかなりあった。とくに，旧鷹栖村や大井川扇状地の散居においては，水量が豊富であることがその集落形成の一つの役割を果していると思われる。それに対し，大畑平は台地上にあるにもかかわらず，散居景観を呈しているところに，これまで述べてきた相違点が見い出されるのではないかと思われる。

この地区は，農業に生活基盤を置いている家が多く，今後の営農意欲も高い。しかし，逆に農業から他の職業への移行も生じている。これは，現在の農業経営にひずみが出ていると考えられ，今後はそれが一層拡大し，他職業への移行がますます増えてく

るのではないかと思われる。

最後に，我々の今回の報告は，胆沢扇状地の一部しか扱っておらないため，胆沢扇状地全般を考察するに至らなかった。そこで今後は，その方向について研究が必要であろう。

（付記）

今回の調査に際し，研究と資料収集に多大なる御協力をいただいた胆沢町役場，土地改良区，水沢市役所および地元「大平畑」の各位に対し，厚くお礼申し上げます。

（注）

1）小川琢治（1914）：　越中国西部の荘宅につきて，地学雑誌312

2）牧野信之助：　散居並びに環濠部落について，歴史と地理27－1

3）村松繁樹（1962）：　日本集落地理の研究，ミネルヴァ書房

4）石田竜次郎（1965）：　砺波散村研究譜，砺波市史編纂委員会編，砺波市史所収

5）金田章裕（1970）：　砺波平野における中世開発と表土との関連についての若干の考察，人文地理22－4

6）小寺廉吉・岩本英夫（1939）：　大井川下流の散居制村落　地理学評論15－9～10

7）岡村光展（1973）：　大井川扇状地における近世散居集落の展開，人文地理25－3

8）谷岡武雄（1973）：　大井川扇状地における散居集落，史林56－3

9）石原　潤（1965）：　集落形態と村落共同体，人文地理17－1

10）村田貞蔵（1939）：　胆沢の景観に関する若干の記録，地理学評論15－9

11）山口弥一郎（1941）：　陸中胆沢扇状地に於ける散居とその生活，地理学評論17－5

12）長井政太郎（1952）：　胆沢扇状地の集落について，東北地理4巻3～4号

13）池田雅美（1970）：　胆沢扇状地における中世開発と表土との関連についての若干の考察，人文地理22－4

14）村田貞蔵（1939）：　胆沢扇状地の形態学的研究，地理学評論15－2

15）田山利三郎・土田定次郎（1939）：　北上山地の地形学的研究，斎藤報恩会，学術研究報告22，1～84

16）中川久夫他（1963）：　北上川中流沿岸の第四系及び地形　地質学雑誌69

17）経済企画庁，国土調査水沢（1963）

18）池田雅美（1966）：　胆沢扇状地における開拓過程の歴史地理的研究，人文地理18－1

19）小野寺信吾（1957）：　岩手県一関市で発見されたDesmostylosと，その産出付近の地質，地質学雑誌63

20）池田は，茂井羅は元亀年間，寿安羅は元和年間に開堰されたことを想定しており，3堰開堰は茂井羅開堰に先立つと考察している。

21）池田は，穴山堰が存した場所は溜池分布地域であろうと考察している。

22）2万5千分の1地形図から宅地を抽出して分布状況を観察した。

23）農地開発委員団による食糧増産を目的とした開墾。

24）大阪市立大学地理学教室編（1969）：　日本の村落と都市，ミネルヴァ書房。

25）聞きとり調査より，天保の大飢饉により農家が離脱したのち，現在の本家筋が新たに入ったことが確認できた。

26）地元では，T系統を旧農家に含んでいないが，本稿では便宜上昭和16年以前の分家をすべて旧農家と称した。

27) 聴きとり調査および地籍図からの計測

28) 川本忠平（1951）： 陸中紫波地方における封建的遺制の一類，地理学評論24－9

29) 胆沢町役場税務課の資料

30) 家屋間の直線距離，胆沢町役場農林課資料，耕地利用図より計測

31) 長井政太郎（1956）： 東北の集落，古今書院

32) ここでは，耕地が不明の家もあり大畑平の90戸のうちの84戸を対象とする。

33) ここでは，各面積の割合の中間をとる。たとえば，80～99％では85％となる。

34) 農業白書　昭和55年より。

35) 昭和55年の政府の畜産対策には，飼料作物への転作の推進と，湿田に対しての生産及び利用に関する技術体系の整備をうち出している。

36) 例えば，旧農家では，あまり手がかからず堆肥などに利用できる肉用牛を多く飼育する。

37) 石原健二（1983）：いまコメが危ない，柏書房

38) 一本の棒のまわりに稲をかけていく方法

39) 現在砺波市に含まれる。

40) 前注24参照，ここでは特に比較を行う上で参考とした。

41) 前注27参照。

42) 水路は上一の台を通っていないため，旧農家の溜池を借りたり，自宅で溜池を掘った。

43) それまで，それぞれの用水で取入口が異っていたので，昭和２年から諸用水合口の事業がはじまり，昭和28年に完成した。

44) ここでの旧農家は丑転のＴ系統を除く。